症例3；68才，女性．胃壁不整，diffuse small Bcell．CHOP 療法施行．寛解を維持．

症例4；26才男性，盲腸腫瘤形成型悪性リンパ腫 diffuse large Bcell．右半結腸切除後 CHOP 施行．寛解を維持．

症例5；36才，男性．胃幽門 Bor 4 型胃癌様所見．biffuse large Bcell，胃全摘後 CHOP 療法施行．寛解を維持．

まとめ；全例 B cell 型，3例が大細胞型であった．肉眼型は多様であったが，大腸は，2例とも腫瘤形成型であった．これらは，これまでの報告と合致する．胃症例は，3例ともヘリコバクターピロリ抗体が陽性であった．

治療は，若年症例は，手術を行いその後化学療法を追加した．他は，化学療法のみであった．消化管原発リンパ腫は，予後良好といわれているが，当院の症例も予後は，良好であった．今後とも生存例4例の経過観察を厳重におこなっていく予定である．

5）小児急性前骨髄性白血病の7例

小川　淳・片岡　哲（県立がんセンター新潟病院小児科）
浅見　恵子
内海　治郎（新潟赤十字血液センター）
笹崎　義博（笹崎こどもクリニック）

小児急性前骨髄性白血病7例の臨床経過を報告した．化学療法のみで治療した3例のうち2例に完全寛解が得られ現在も無病生存中である．all-trans retinoicacid（ATRA）にて治療した4例のうち3例に ATRA で完全寛解が得られた．残る1例は強化療法後に寛解した．この1例は寛解15ヶ月後に CNS 再発を来したが治療に反応して現在は CNS，BM とも寛解を続けている．他の3例は初回寛解を続けている．小児においても ATRA 療法は高い完全寛解率が得られるが，DIC の早期改善効果は明らかではなく，逆に RA 症候群，WBC 増加，DIC の再燃等の合併症に注意が必要である．

6）特異な慢性型のリンパ性白血病2症例

斎藤　弘行・森山　美昭（燕労災病院内科）

慢性リンパ性白血病は成熟リンパ球様細胞が monoclonal に増殖した病態であるが，その範疇には多くの亜型が含まれ，時に正確な鑑別診断が困難なこともある．慢性に経過し，徐々に腫瘍性リンパ球が増加することにより貧血の進行など種々の臨床症状が増悪することになるのが一般的であるが，時に特異な臨床経過を示すことがある．このような例として我々は，原発性マクログロブリン血症（MW）から移行したと考えられるB細胞性前リンパ球性白血病（B－PLL），診断から数カ月の経過後に明らかな transformation やリンパ球増加を伴わずに胸膜浸潤および急性腎障害をきたしたT細胞性慢性リンパ性白血病（T－CLL）の2症例を経験している．B－PLL 例は82歳の男性で，12年前に MW と診断されていたが，その時点では白血球数は正常であった．その後，徐々に白血球（リンパ球）が増加してきたが，興味深いことに病像の進行とともに IgM 値はむしろ減少傾向を示した．長期間を経ての MW からB－PLL への病態変化の可能性が推測されたが，両疾患はB細胞分化とその腫瘍化においては連続したスペクトラムを有していたものと考えられる．その一つの根拠として PLL 細胞の表面免疫グロブリン（IgM κ）は MW の単クローン性γグロブリンと一致していた．T－CLL 例は69歳の女性で，疾患それ自体が極めて稀なものと考えられる．欧米においては，B－CLL と同様な小型のリンパ球形態を有するT細胞性の CLL という疾患は存在しないとさえいわれてきたが，本症例のように明らかにこのような疾患単位は存在する．本症例の臨床経過で特異的なことは，明らかなリンパ球形態やリンパ球数の変化を伴わずに突然臓器浸潤をきたした点であろう．また，いずれの症例も cyclophosphamide の一定期間の投与のみで症状は軽快し，その後は無治療にても良好な状態が維持されていることは興味深い．

7）当院における治療関連白血病の臨床

永井　孝一・阿部　惇（県立中央病院内科）
村川　英三
関谷　政雄（同　病理検査科）

【はじめに】癌患者数の増加および，治療の進歩による癌の治癒率や生存率の向上に伴い，癌治療に起因したと考えられる二次癌の増加が注目されている．欧米の最近の報告では，全白血病に占める治療関連白血病の割合は，10～20％と報告されており，本邦でも増加傾向にあるといえる．今回，私達は新潟県立中央病院にて治療した治療関連白血病の臨床的検討を行ったので報告する．

【対象および方法】1988年1月より1998年9月まで

Case	Age	Sex	Primary tumor	Chemotherapy	Radiation	Interval (M)	Type of leukemia	Karyotype	Therapy	Response	Outcome
1, SK	69	M	laryngeal ca	−	+	120	AML (M5)	normal	Ara−C DNR	NR	died 3 M
2, HK	71	M	myeloma	VCR, L−PAM, CP, PRD	−	63	AML (M5)	del (7)	Ara−C	NR	died 1 M
3, KK	52	M	NHL	THP, CP, VCR, MTX, PRD, VP16	+	40	AML (M4)	t (11 ; 19)	BHAC−DMP	NR	died 9 M
4, TH	53	M	bladder ca	VP16	−	180 (38)	AML (M3)	t (15 ; 17)	ATRA	CR 18M	relapse died 20M
5, ST	43	M	lung ca	5 FU, CDDP, MMC, VDS, VP16	+	39	AML (M3)	t (15 ; 17) t (2 ; 11)	ATRA	CR 2 M+	alive

に，新潟県立中央病院内科にて加療した成人の急性非リンパ性白血病（以下 ANLL）症例60例を対象とし検討した．

1932年の Warren らの判定基準に基づき重複癌を診断し，一次癌の治療に抗癌剤による化学療法か放射線療法が，単独または併用されており，一次癌と白血病発症の間隔が6ヶ月以上の症例を治療関連白血病と判定し，解析した．

【結果】ANLL60症例のうち，治療関連白血病の診断基準に合致した症例を5例認め，5例ともに1995年以降に ANLL を発症していた．症例のまとめを表に示す．

【考察】治療関連白血病の増加要因として，癌に対するいわゆる集学的治療法の進歩による治癒（寛解）率の向上と，抗腫瘍剤の進歩が挙げられており，症例の解析と蓄積により，発症の予防と治療の向上が望まれる．

8) AML に対する自己末梢血幹細胞移植併用大量化学療法 phase Ⅱ pilot study

今井 洋介・広瀬 貴之（PBSCT 研究会 造血器腫瘍部門）
石黒 卓朗・張 高明

第一寛解期の AML に対する自己末梢血幹細胞移植の臨床効果は現在のところ確立されていない．我々は今回，第一寛解期 AML に対する自己末梢血幹細胞移植の phase Ⅱ pilot study を行った．1993年12月以降，標準化学療法にて完全寛解となった15歳から65歳までの患者を対象とした．105症例を登録し，その年齢中央値は45歳，男性が71名，女性が34名であった．そのうち，56症例に対して自己末梢血幹細胞移植が行われた．46.7%にあたる49症例は，種々の理由で移植が行われなかった．採取した幹細胞については，フローサイトメトリーにて CD34陽性細胞数を測定，その中央値は，2.3×10^6/kg で，early collection と，late collection の間に差はなかった．移植前治療としては，BU/CY 群と，G−CSF combined BEA 群とに分けて行い，後者では特に，副作用として重篤な口内炎を生じた．移植後14〜16日後にはおおよそ，好中球500，血小板2万程度まで骨髄機能の回復を得ることができた．移植症例全体の長期 DFS は58.8%に達し，その中央値は684日であった．限られた症例数と，短い観察期間ではあったが，今回の phase Ⅱ study の結果，AML における自己末梢血幹細胞移植併用大量化学療法は feasible であり，AML の寛解導入後療法として有望であることが示された．この結果をふまえ，現在，1st CR の AML を対象として，維持療法群と，自己末梢血幹細胞移植群とに分ける無作為臨床試験が進行中である．